

七 舞へくかたつむり

舞へくかたつむり

梁塵秘抄

舞へくかたつむり、舞はぬものならば、うまの子やうしの子にくゑさせてむ、踏みわらせてむ、まことに美しく舞うならば、花の園まで遊ばせむ。

まつの木かげに立ちよりて、岩もる水をむすぶまに、扇の風も忘られて、夏なき年とぞ思ひぬる。

池の涼しきみぎには、夏のかげこそなかりけれ、こだかきまつを吹く風の、声も秋とぞ聞えぬる。

遊びをせむとや生まれけむ、たはふれせむとや生まれけむ、遊ぶ子どもの声聞けば、わが身さへこそゆるがるれ。

日光

一

もろ手そろへて日の光すくふ心ぞあはれなる。
すくへどすくへど日の光、

光りこぼるる、音もなく。

二

光りかゞやく何ものかにぎりしめんとす、日もすがら。
光りかゞやく空中に手をにぎりしめ、また聞き。

三

何かおどろき、見まはせど、
かゞやくものは日の光。

ふつともらししたため息をわがものぞとは人知らず。

四

光あふるるつたかづら、
ゆりうごかすは日の光。
たゞ日の光、日のしづく。

ひがらとつばき

つばきにひがらが飛んで來た。
あれ、あれ、空見てないている。

つばきの花がさみなあかい、
重なり重なり咲いている。

ひがらの頭は動いてる。
なく時、なく時、動いてる。

つばきの花がさゆれだした。
花から花へとゆれだした。

花から花へとゆれだせば、
どの葉もどの葉もゆれだした。

枝から枝へと飛び／＼に、
ひがらはなき／＼遊んでる。

ひがらはどんなにうれしかろ、
つばきもどんなにうれしかろ。